

2006.9.16 【本当に生命保険は必要なのでしょうか？】

《生老病死》『入院しても、充分なお金の貯えがあれば生命保険は不要です』

人間生まれたときから「死ぬ」ことが約束されております。

「死ぬ」までの一生涯、自分にとって「元気で健康」が一番。病院にもかからず、薬も飲む必要性がありません。

では「元気で健康」でなくなれば、病院に「入院」したり「手術」したり「介護人」の必要性があります。

このときには「入院」と「手術」と「介護人」に、思いがけない「お金」がかかります。思いがけない「お金」の出費に備えて、自分の「お金」の貯えが「充分」あれば『生命保険』は必要ではありません。

『死んでも家族が困らないお金の貯えがあれば、生命保険は不要です』

自分が「死ぬ」ことにより、「死んだ自分」は絶対に困りません。困る人は残された自分の「家族」です。いつか「死ぬ」ことは分かっていますが、いつになるかは誰にも分かりません。

すなわち「死ぬ」のも思いがけなく「死ぬ」ものなのです。残された「家族」が「困る事」は、自分が稼いできた「生活費用」をすべて失うから、「生活できない状態」が「困る事」なのです。

しかし「思いがけない」このときに、家族が困らないだけの「生活費用」の貯えがあれば『生命保険』は必要ありません。

『数百万円から数千万円のお金の用意ができない場合に、生命保険を活用』

「元気で健康」でなくなった時の「入院」と「手術」と「介護人」にかかる「費用」と自分が「死んで」残された「家族」に対する「生活費用」、十分にタツプりと貯えていない場合に「だけ」、『生命保険』の必要性が発生します。

「入院」にかかる「費用」も「家族」に対する「生活費用」も、数百万円から数千万円に及ぶので、それだけ「貯蓄」することは、なかなか「実現」できない場合が多いと思います。

『貯蓄を引いた残りの、必要金額が生命保険の加入目安です』

「生命保険」の加入に際して、「必要金額」をいくら「加入」したらいいものなのか判断材料は、「入院」にかかる「費用」と残された「家族」に対する「生活費用」をいくらにするのか？ただこのことだけを念頭に入れて試算してください。

あくまでもこの時、自分の家計で「貯蓄」部分を差し引いて、残りがいくらからい「不足費用」が生じるのかを計算してください。

『代理店は「不測事態」の「不足費用」を試算するお手伝い役』

しばしば「生命保険」コンサルタントが、小難しい「根拠」を元にアドバイスして、結局、必要以上に「高額な保険料」を支払っているケースもあるので、あくまでも自分が「不測事態」に備えて「不足費用」を試算するのが、「シンプルイズベスト」です。代理店はそのときの「お手伝い役」です。